

第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

この村の神画は、同村に在住する祭司の趙金付氏(ミエン人、1963年生まれ)が所有しており、19点1組となっている。ただし、張天師神画は2点あるため、合計で18種類となる。神画の名称は、以下の通りである。

元始天尊(図1-1)、靈寶天尊(図1-2)、道德天尊(図1-3)、玉皇(図1-4)、聖主(図1-5)、天府(図1-6)、地府(図1-7)、張天師(図1-8-1)、張天師(図1-8-2)、李天師(図1-9)、把壇師(図1-10)、大海番(図1-14)、十殿(図1-15)、海番張趙二郎(図1-16)、太歳<太尉>⁵(図1-17)、三將軍(図1-18)、総壇(図1-19)、監齋大王(図1-20)、大道橋梁

趙金付氏によると、天地水陽神画⁶もかつては所有していたが、1998年、儀礼が行われた際に、蠟燭が天地水陽神画を入れたダンボールに倒れて火事が起こり、燃えてしまったとのことである。

趙金付氏が所有している神画は、剥離が激しく、虫に食われて穴の空いたものも見られるように保管状態も悪い。儀礼での使用状況は、神画を祭壇に掛けた後、ごく近い場所に供物台を設置し、その上に線香を立て香炉や蠟燭や灯明などを供える。さらに供物台の周囲で頻繁に紙銭を燃やすため、神画の一部が破れたり燃えたりすることが度々起こるのである。

趙金付氏によれば、これらの神画は、師匠の趙子鳳(ヤオ族、1928年～2000年)から継承されたものだという。趙子鳳は、元々は寧遠県に住んでおり、後に藍山県に転入した。趙子鳳は血縁からいうと趙金付氏の伯父にあたる。趙子鳳は、犁頭瑤族郷に住んでいた師匠(趙子鳳の舅)から神画を受け継いだという。この趙子鳳の師匠は、寧遠県に住んでいる師匠から継承したものであるという。この神画の継承経路をまとめると、寧遠県→犁頭瑤族郷→寧遠県→藍山県となることから、現在、趙金付氏が所持しているこの神画は、元々寧遠地域のヤオ族が持っているものであると推測できる。

この19点1組の神画のうち、元始天尊と太歳(太尉)には、銘文が記されている。そこから、神画の制作経緯や制作年代や絵師などの情報を推測することが出来、以下この2点の神画に書かれた銘文について述べる。

◆元始天尊神画に書かれた銘文

元始天尊神画(図1-1)に書かれた銘文は、神画の中央下部にあり、内容は以下の通りである。
(■は解読不能箇所)

〈銘文〉

福主信士盤法有合家合■発心彩画功德三位神■供奉惟願人発千丁糧進万石丹青楊子蘭于
光緒二十年八月之日大吉

〈訳〉

福主の信士盤法有(法名)は家族心を合わせて、三清神を描くことを発心し、子孫が増え、

豊作になるように祈願し祀った。絵師楊子蘭によって光緒 20 (1894) 年 8 月大吉の日に描かれた。

◆太歳<太尉>神画に書かれた銘文

太歳<太尉>神画(図 1-17)に書かれた銘文は、神画の右上にあり、内容は次のようである。

<銘文>

今據大清天下湖南省直桂陽州藍山縣仙政鄉信仁福主盤法祿夫妻謫議發心得買神像一堂四軸言定■錢壹兩五分正以後伝與後人子孫四方相請香火不斷馬脚不停香火通行萬事大吉福有所帰丹青弟子臨武周国珍道光九年廿八日開光大吉

<訳>

今、大清国の天下に於いて、湖南直桂陽州藍山縣仙政郷に住む、信仁福主盤法祿(法名)夫妻は相談して発心し、四軸の神画を買うことができた。相談した上で錢を1兩5分払うと定めた。その後この神画は子孫たちに継承する。四方から請われて招聘され、香火は絶えることなく、馬は脚を止めず、香火は永遠に伝えられる。萬事は大吉であり、福が帰すように願う。絵師、臨武(地名)の周国珍によって描かれ、1829年28日に開光した。

この二つの銘文から、三清(元始天尊・靈寶天尊・道德天尊)の3点の神画は、1894年に描かれ、太歳<太尉>を含む4点の神画は、1829年に描かれたことが分る。神画を制作する依頼者の家主の法名や神画を描く絵師の名などに関する情報も明記されている。

趙金付氏によれば、ヤオ族儀礼神画は「行師」神画と「三清兵馬」神画に区別される。「行師」神画は太尉、唐葛周三將軍、海幡張趙二郎、総壇の4点の神画を指し、「三清兵馬」神画は三清(元始天尊・靈寶天尊・道德天尊)を含む他の神画のことを指すという。従って、趙金付氏が所有している太歳<太尉>神画に書かれた銘文中の「神像一堂四軸」とは、太尉、唐葛周三將軍、海幡張趙二郎、総壇4点の神画から構成される「行師」神画のことを指している。

また、太歳(太尉)神画に記された銘文からは、施主の盤法祿(法名)夫婦は湖南直桂陽州藍山縣仙政郷に住む人であり、絵師の周国珍は臨武県の人であることが分る。臨武県は、藍山県の東南部に隣接する地域である。銘文内容によると、当時藍山県に住む盤法祿は、臨武県に住む絵師の周国珍に頼み、1兩5分の銀錢で三清神画を購入した。元始天尊神画に記されている銘文には、施主及び絵師の居住地が書かれていないため、地域の判別はできない。

趙金付氏によると、現在の藍山県には神画を描く絵師がいなかったため、氏は師匠から神画を受け継いでから、ずっと神画を描く絵師を探していたという。小学校の美術教師に依頼したことがあるが、描くことはできないと断られたこともある。後に、藍山県県城で画家に尋ねたところ、費用は高い人で1点3000元、安い人でも1800元かかると言われたという。1組の神画を新たに制作する費用を捻出することができないため、古くなった神画を使い続けている。

2010年に、趙金付氏より、神奈川大学ヤオ族文化研究所に神画の複製を委託され、筆者が複

第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

製を担当した。複製に際しては、ヤオ族文化研究所の写真資料⁷を用い、画像を編集する Adobe ソフトウェアの PHOTOSHOP で忠実に複製を試みた。現時点では、元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、太歳<太尉>、海番張趙二郎、総壇、唐葛周三將軍、王靈官神画の各 1 点ずつの複製が終わっている。

この中の王靈官神画の原画は、趙金付氏の所有ではなく、同郷の荊竹坪村寒鷄沖組に住む盤保古氏が所有するものである。趙金付氏と盤保古氏は、現地の有能な祭司であり、普段から共に儀礼を担当している。2011 年 11 月の調査の際、筆者が、趙金付氏に元帥神の神画は 2 枚 1 組でなければならないのになぜ 1 点しか所有していないのかと尋ねたことがあった。趙金付氏はずっとこのことを気かけ、後に、盤保古氏の持っている神画の中から、王靈官神画を見つけた。この王靈官神画は、趙金付氏の所有している把壇師神画と対になるものであり、複製を行う運びとなったのである。

第2項 湖南省永州市藍山県匯源瑤族郷荊竹坪村寒鷄沖組神画

荊竹坪村も匯源瑤族郷に属する五つの村の一つである。前述した湘蘭村より、荊竹坪村はさらに山深いところにあり、標高も高い。

荊竹坪村の神画は、寒鷄沖組に居住する祭司の盤保古氏(ミエン人、1964 年生まれ)が所有しており、17 点 1 組となっている。中に、靈寶天尊神画は 2 点あるため、合計 16 種類である。神画の名称は以下の通りである。

靈寶天尊(図 2-2-1)、靈寶天尊(図 2-2-2)、道德天尊(図 2-3)、玉皇(図 2-4)、聖主(図 2-5)、天府(図 2-6)、地府(図 2-7)、張天師(図 2-8)、李天師(図 2-9)、把壇師(図 2-10)、王靈官(図 2-12)、十殿(図 2-15)、海番張趙二郎(図 2-16)、太尉(図 2-17)、三將軍(図 2-18)、総壇(図 2-19)、監齋大王(図 2-20)

これらの神画は、あまり儀礼に用いられていないため、比較的良い状態で保存されている。しかし、中には破損が非常に激しい神画が 1 点ある。それは三將軍神画であり、神画の表面は完全に破れてしまい、描かれている内容も、識別不能の状態である。

この組の神画は、趙法靈という祭司から継承されたものである。氏は、寧遠県出身で、盤保古氏の義父(妻の父親)の親戚であり、2 度婿入りをしたという。1 度目は藍山県所城鎮幼江村に、2 度目の婿入りは匯源瑤族郷にある盤保古氏の義父が住んでいた生産大隊⁸であった。趙法靈が亡くなった後、神画を継承できる人がいなかったため、ずっと趙氏が生前に住んでいた家屋の梁に掛けられていた。ある雨夜に、雨に濡れた神画が音をたて靈驗を現し、村の中が不穏になった。そのため盤保古氏は、趙法靈の古い家屋から神画を背負って持ち帰った。その後、村の中も平安になり、それ以来趙法靈の神画は、盤保古氏の所有となった。

湘藍村に住んでいる馮榮軍氏⁹によると、当時盤保古氏は、度戒儀礼を受けておらず、この

第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

儀礼を通過していないため三清神画を所有する資格を得ていないといった。しかし当時の状況に鑑みるに、盤保古氏は神画を劣悪な環境の中から救い出したのであり、害が及ぼされることはないといった。¹⁰

盤保古氏が所有するこの神画には、海番張趙二郎神画(図2-16)にのみ銘文が書かれている。銘文は神画の左側、中央下部にあり、内容は以下の通りである。

〈銘文〉

太清国湖永州府道州寧遠県先進郷大地名紅江源小地名■僚坪立宅居住信仕福主盤法念合家眷等自發誠心命請常寧県清李功和李功貴作彩画神像四軸福所帰子孫為記皇上嘉慶十一年十月卅日開光大吉々良黄

〈訳〉

今大清国に於いて、湖南永州府道州寧遠県先進郷紅江源■僚坪に家を建て居住する。そこに住む信士福主盤法念(法名)及び家族全員の申し出によって、誠意を持って発心し、常寧県の絵師李功和李功貴に依頼して、四軸の神画を買うことができたことを子孫が銘記する。皇上嘉慶11(1806)年10月30日に開光して大吉である。

銘文から、海番張趙二郎神画を含む4点の神画は1806年に描かれ、10月30日に開光儀礼が行われたことが分かる。先述したように、ヤオ族儀礼神画では、太尉、海番張趙二郎、唐葛周三將軍、総壇4の神画は4点1組で「行師」神画と呼ばれる。このことから、銘文に名前の記されていない他の3点の神画は、太尉、唐葛周三將軍、総壇の神画だと推測できる。

また銘文からは、神画の依頼者の居住地が、「湖南永州府道州寧遠県先進郷紅江源■僚坪」であり、絵師は、同省の常寧県に住んでいたことが分かる。興味深いのはこの4点の神画を描く絵師が二人いる点である。絵師の名前からみると、二人は兄弟あるいは従兄弟関係にあると推測できる。他のヤオ族地域の神画の銘文にも、このような二人の絵師の名前が並び記される例がある。絵師を職業とする人は、兄弟(従兄弟)あるいは父子関係の場合が多いのではないかと考えられる。

第3項 湖南省永州市藍山県所城鎮団源村神画

中国湖南省永州市藍山県所城鎮は、藍山県の中南部に位置し(地図3)、北部に匯源瑤族郷が隣接する。県内に約26ヵ村があり、団源村はその中の一つである。

団源村の神画は、元々祭司の盤喜古氏(ミエン人、1933年~2012年)が所有していた。盤喜古氏は、生前に掛三灯儀礼は行っているものの、度戒儀礼を経ていなかったため、「行師」神画の4点しか持つことができなかった。神画の名称は以下の通りである。

海番張趙二郎(図3-16)、太尉(図3-17)、三將軍(図3-18)、総壇(図3-19)

第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

匯源瑤族郷湘蘭村の趙金付氏によると、2012年に、盤喜古氏が事故で亡くなった後、この4点の神画は喜古氏の家族によって売りに出されたという。現在、神画の行方は不明となっている。

この神画は、特に破損がなく、比較的良好な状態で保存されている。盤喜古氏は、神画を儀礼に用いた後、必ず白布で丁寧に包み、赤い紐で縛り、師棍¹¹の先端に掛け、肩に担いで神画を持って帰宅する。

このような包み方あるいは縛り方は、現在の中国のヤオ族地域ではあまり見られない。多くの祭司は、神画を祭壇から下ろした後、数枚の神画を重ねてひと巻きにまとめ、ビニール製の紐で縛り、地面に置いておくのが普通である。しかし、ビニールの袋と紐は、神画を傷めやすく、地面に置くことにより、神画の両側の縁取りが破損することが起こりやすい。盤喜古氏の包み方は、神画を傷めないための良い方法である。このことから、喜古氏の神画を大切にしたいという気持ちが強く感じられた。

盤喜古氏所有の神画は、誰から継承されたのかは明らかにされていない。4点の神画の中に、海番張趙二郎と総壇神画の2点に銘文が記されており、そこから情報の一部を窺うことができる。

◆ 海番張趙二郎神画に書かれた銘文

海番張趙二郎神画(図3-16)に書かれた銘文は、神画の左側、中央寄りの下部にある。内容は以下の通りである。

〈銘文〉

信士行教弟子趙法興妻趙氏合家發心請匠彩画行壇功德四軸子孫永遠十方応用■常寧県丹青楊画又兄弟■皇清乾隆二十五年庚辰歲十一月二十一日

〈訳〉

信士行教弟子の趙法興(法名)及び妻の趙氏は家族全員と共に発心し、匠に行壇功德4軸の神画を依頼した。子孫は長く続いて絶えないように、十方で使えるように願う。常寧県絵師の楊氏兄弟が描いた。皇清乾隆25年(1760)年辰年11月21日。

この銘文から、海番張趙二郎を含む4点の神画は、1760年に描かれたことがわかる。文末に書かれた「十一月二十一日」の日付は、神画の開光儀礼を行った日であると推測する。銘文に記された「行壇功德四軸」は、現在でいう「行師」神画のことを指していると考えられる。趙金付氏によれば、現地で神画は又の名を「功德」kontaとも呼ぶそうである。このため、「功德」は神画を意味する言葉だといえる。また銘文から、依頼者は趙法興夫婦を主とする趙家であり、絵師は常寧県の楊姓兄弟であることが分かる。

◆ 総壇神画に書かれた銘文

総壇神画(図3-19)に記された銘文は、神画下部の中央にある。内容は以下の通りである。

〈銘文〉

丹青請陵武周国金発売行像一堂銀錢一仟三百文 買進用保■■ 嘉慶廿年五月初五日

〈訳〉

陵武絵師の周国金を頼んで、銀錢 1300 文の値段で 1 組の行師神画を売ってくれた。■■を護るため購入した。嘉慶 20 (1818) 年 5 月 5 日。

銘文には依頼者の情報は詳しく書かれていないが、神画を購入するために 1300 文の金がかかったことが分かる。最後に書かれた日付は、神画の開光儀礼が行われた日だと推測する。

総壇神画の銘文には、絵師は「陵武周国金」と記されている。本節の第 1 項で述べた趙金付氏が持っている太歳〈太尉〉(図 1-17) 神画には、「臨武周国珍」と記されているが、盤氏が持っていた総壇神画と趙氏が持っている太歳(太尉神画)の銘文に書かれた絵師とは同じ人物ではないかと考える。前述したように、「臨武」は湖南省にある県名であり、藍山県の東部に位置する。「陵(líng)」と「臨(lín)」の発音が近いので、「陵武」は「臨武」の同音異字であると考えられる。また「金(jīn)」と「珍(zhēn)」の発音は近いので、「周国金」は「周国珍」の同音異字の可能性もある。あるいは、「周国金」と

「周国珍」は、兄弟または従兄弟の可能性もあると考えられる。

分析を重ねていくと 1 組の神画を新たに制作する際に、最も位が高い神画に銘文を書く習慣があるということが明確になってきた。例外として書かない場合もある。しかし、1 組の神画であれば 2 点に銘文を書く必要はないと考えるので、盤喜古氏が持っていたこの組の「行師」神画は、恐らくもともと 1 組のものではなく、別のセットであったものが後に組み合わせられたものであったと推測する。



〈図 5〉 湖南省永州市江華瑶族自治县地図 ¹²

第 4 項 湖南省永州市江華瑶族自治县神画

江華瑶族自治县は、湖南省南部に位置する。東に藍山県、南に広東省連州市、西に江永県と広西壮族自治区富川瑶族自治县、北に道県に隣接する。江華瑶族自治县は、中国で最もヤオ族人口が多く、面積の広い瑶族自治县である。

この神画資料は、2013 年 11 月に、江華瑶族自治县県城で盤王祭 ¹³ を調査した際、写真撮影

第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

を行ったものである。その際、江華瑶族自治县民族宗教局の幹部の鄭艶瓊は、筆者が神画資料を収集していることを聞きつけ、翌日家に収蔵している神画を持参し、写真を撮らせてくれた。

現在、この神画は、儀礼には使われておらず、鄭艶瓊の自宅に保管されているという。鄭氏は、神画は県内の某村から収集されたものであるという。神画の裏面に「馮法真号」という文字が記されており、元の所有者名ではないかと推測する。神画は、17点17種類あり、名称は以下の通りである。

元始天尊(図4-1)、靈寶天尊(図4-2)、道德天尊(図4-3)、玉皇(図4-4)、聖主(図4-5)、天府(図4-6)、地府(図4-7)、張天師(図4-8)、李天師(図4-9)、海幡(図4-14)、十殿(図4-15)、海幡張趙二郎(図4-16)、太尉(図4-17)、三將軍(図4-18)、総壇(図4-19)、監齋大王(図4-20)、大道橋梁¹⁴

この組の神画は、儀礼に使用されていないため、非常に良い状態で保存されている。元始天尊神画(図4-1)の下部中央には、銘文が記されており、内容は以下の通りである。

〈銘文〉

今在下梅住居信仕香主馮法全妻趙氏所生男合家眷等發心彩画大堂一十式軸日後家下人丁興旺五谷豐登香門大旺百事大吉子孫永遠為記 福友所歸 丹青 王家義画 道光十六年丙申十一月十七開光吉旦

〈訳〉

今、下梅に居住している信仕香主の馮法全(法名)と妻の趙氏、及び息子の家族が共に、1組12軸の神画を描くことを発心した。やがて家に人が増え、五穀が豊穰であるように、香火が永遠に盛んになって行くように、全てが大吉になるように、子孫たちは永遠に銘記し、福は帰するように願う。絵師、王家義が描く。道光16(1836)年11月17日に開光儀礼を行った。吉日であった。

この組の神画は、「盤王図」という名称で、『湖南民間美術全集・民間絵画』¹⁵に収録されている。図録には、「这是一套道教功德画，於清代道光年間開光。由於在瑶族民間流傳、被習稱為〈盤王図〉。(訳：これは1組の道教功德画である。清代・道光年間に於いて開光儀礼がおこなわれた。ヤオ族の民間で伝承されていたため、習慣的には盤王図だと称する。)」と記されている。さらに、神画毎に説明文も加えられ、どのような神々が描かれているのかについて述べられている。

第5項 湖南省永州市江華瑶族自治县両岔河郷両岔河村神画

両岔河郷両岔河村は、江華瑶族自治县の最南端に位置する（地図4）。両岔河村の神画は、祭司の李法科氏（法名）が所有している。前述したように、2013年11月に、江華瑶族自治县県城で盤王祭の調査を行った。その際、李法科氏が所有するこの神画は、江華瑶族自治县県城の中心部に建てられた盤王殿の正殿に展示されていた。

神画の中に、太尉と唐葛周三將軍神画は2点ずつあり、合計20点18種類ある。名称は以下の通りである。

元始天尊（図5-1）、靈寶天尊（図5-2）、道德天尊（図5-3）、玉皇星主（図5-4）、星主（図5-5）、天府号（図5-6）、地府号（図5-7）、張天師号（図5-8）、李天師号（図5-9）、馬元帥号（図5-11）、王靈官号（図5-12）、海播号（図5-14）、十殿号（図5-15）、海播全寧号（図5-16）、太尉号（図5-17-1）、太尉全寧号（図5-17-2）、三將軍（図5-18-1）、三將軍全寧号（図5-18-2）、総壇（図5-19）、庫官号（図5-21）¹⁶

この神画は、あまりよい状態で保存されていない。紙質が老朽化して脆くなり、非常に破れやすい。神画の上部と下部、及び裏に、セロハンテープを貼り破れを補修した跡が多く見られた。

李法科氏によると、神画は師匠の趙科一郎から継承されたものであるという。もともと神画の裏面に、神画の所有者である「趙科一郎」の名前が記されていたが、李法科氏は神画を継承した後、師匠の名前を塗り潰し、自分の法名を加えた。まだ消されていない部分もあり、「趙科一郎」の名が確認できることから、李氏の話と一致している。

この神画に銘文は書かれていない。李天師神画の中央部右側に、銘文を書くところが作られてはいるが、文字は書き入れられていない。

三將軍全寧号神画の裏には、「■礼応礼効二人成画」という文字が書かれている。この文字から、神画は、礼応と礼効という名前の二人の絵師によって、描かれたものと推測できる。これ以外の記述がないため、神画の制作年代に関しては明確ではない。

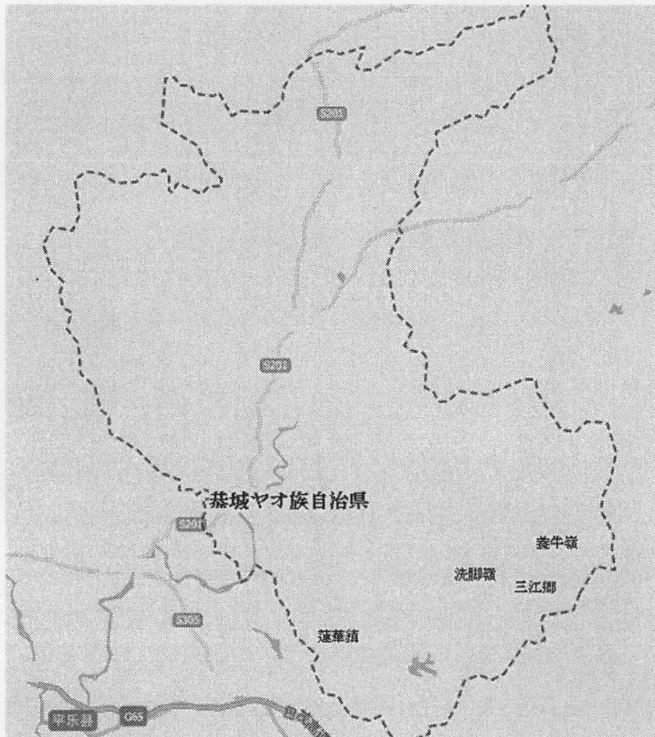
第6項 広西壮族自治区恭城瑶族自治县蓮華鎮神画

恭城瑶族自治县は、広西壮族自治区の東北部に位置する。東に、富川瑶族自治县と湖南省江永県、南に鐘山と平楽県、西に陽朔と靈川県、北に灌陽県が隣接する。蓮華鎮は恭城瑶族自治县県城の南部に位置する。

この神画は、広西壮族自治区恭城瑶族自治县蓮華鎮に在住する祭司の黃通旺氏（ミエン人、1943年生まれ）が所有している。合計18点18種類あり、筆者が恭城瑶族自治县黄泥岡村で行われた盤王祭の調査を行った際に集めた資料である。神画の名称は以下の通りである。

第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

元始天尊(図6-1)、靈寶天尊(図6-2)、道德天尊(図6-3)、玉皇(図6-4)、聖主(図6-5)、天府(図6-6)、地府(図6-7)、張天師(図6-8)、李天師(図6-9)、馬元帥(図6-11)、黃元帥(図6-12)、海番(図6-14)、十殿(図6-15)、太尉(図6-17)、監齋(図6-20)、庫官(図6-21)、王姥(図6-22)、天橋¹⁷



〈図6〉 広西壮族自治区恭城瑶族自治县地図¹⁸

この神画は、2012年11月に恭城瑶族自治县蓮華鎮黄泥岡村の「盤王祭」において用いられた。その際、大道橋梁神画を除き、他の17点の神画が全て祭祀場に飾られた。

神画は、紙ではなく、布に描かれたものである。油絵の顔料で描かれたため、丈夫そうでも色も落ちにくいと感じられる。破損の箇所は特にないが、紙銭を燃やす際に出た煙に燻され、色が黒くなっている。紙製のものより、布製のほうが汚れや煙などを吸収しやすいため、神画が黒くなったと考えられる。

黄通旺氏によれば、自宅に元々17点の神画を継承していた。しか

し文化大革命の際に、紅衛兵によって神画を取り上げられ破却されたくないため、黄通旺氏の父親は自ら神画を燃やしたという。1992年に、黄通旺氏は、度戒儀礼を経て、新たに18点の神画を制作しようと考えていた。そこで知り合いの紹介で、同省鐘山県に在住している楊呈応という漢族出身の絵師に依頼した。神画制作に際しては、1ヶ月ぐらいかかったという。制作経緯については、元始天尊神画(図6-1)の銘文に書かれている。内容は以下の通りである。

〈銘文〉

因社會形勢■■■下無法保留原有神像父親將画毀■■後于乙亥歲仲春月請得鐘山縣紅花鄉大
宮村丹清師父楊呈應到大田灣黃法靈家照底彩書滿堂聖像■■■十七尊天橋一条承■■家主黃
法顯時值■■■幣■■于公元一千九百九十五年季春月吉日成工

〈訳〉

社会情勢により元来所有していた神像を所持することができなくなり、父親が神像を破

第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

却した。後に1995年旧暦2月に、鐘山県紅花郷大営村に住む絵師の楊呈應を大田湾にある黄法靈（法名）の家に招聘し、模写して神像17点、天橋1条を制作した。家主である黄法顯（法名）は当時人民幣■■元を要し、1995年旧暦3月の吉日に完成した。

この銘文に記された内容は、正に黄通旺氏のいう通りのものである。銘文によると、黄家が元来継承していた神画が、なぜ壊され、また、いつ、誰に依頼し、どのように新たに制作されたのかについて、明記されている。さらには神画を制作するのに必要だった金額と、開光した年月日も記されている。残念ながら、金額の部分は儀礼に使用した雄鶏の血に汚されて読み取れなかったが、2013年に筆者が現地で調査した際、張晶晶から黄通旺氏の神画は1500元かかったと聞き、制作に必要な金額も明確になった。

第7項 広西壮族自治区恭城瑶族自治县三江郷洗脚嶺村神画

恭城瑶族自治县三江郷洗脚嶺村は、恭城瑶族自治县の東部に位置している。2013年の調査の際、この村に神画は1組あり、祭司の趙乙昇氏（ミエン人・1965年生まれ）が所有していた。太尉神画は2点あるため、合計25点24種類の神画がある。中に、名称が分からない神画が2点（図7-22、図7-25）が含まれている。この神画（図7-22）に描かれる内容は、*Yao ceremonial paintings*中の「Kiem Tsei 禁斎」神画と相似するため、本論では「禁斎」の名称を引用する[Lemoine 1982: 142-145]。図7-25の右上には、「施食」という字が記されているため、以下この神画の名称として使用する。ここの組の神画資料は、2013年の調査で集めたものである。神画の名称は以下の通りである。

元始天尊（図7-1）、靈寶天尊（図7-2）、道德天尊（図7-3）、玉皇（図7-4）、中天星主（図7-5）、天府（図7-6）、地府（図7-7）、張天師（図7-8）、李天師（図7-9）、馬元帥（図7-11）、王靈官（図7-12）、海幡（図7-14）、十殿（図7-15）、龍樹海幡（図7-16）、太位（図7-17-1）、行象太尉（図7-17-2）、行象唐角（図7-18）、行象総壇（図7-19）、庫官（図7-21）、王姆娘娘（図7-22）、施食（図7-25）、四府功曹・左（図7-24-1）、四府功曹・右（図7-24-2）、禁斎（図7-26）、大道橋梁¹⁹

この神画は、太位と王姆娘娘神画を除き、剥離が非常に激しい。神画を入れた袋を開くと、カビの臭いが漂った。神画の表面を触ると、顔料が粉状になって落ちてくる。また虫に食われた穴、老朽化による破れなども多く見られた。

特に左側の縁が、完全に破損した状態になっている。趙乙昇氏によると、神画を濡れた地面に置いたことがあり、ビニールで包んでいなかったため、神画が水を吸い込み、左側の縁が全て駄目になってしまったという。

張晶晶の口述によれば、この神画は、趙家の先祖から受け継いだものではないという。趙家の

神画は、「批林批孔運動²⁰」の際に、燃やされたとされる。現在持っているこの神画は、大界厄（地名）に住んでいた同姓の家から得たものであるという。大界厄の趙家の子孫たちは、嫁や婿に行き、神画を受け継ぐ人がいなかったため、趙乙昇氏の父親はこの神画を譲り受けたとされる。現在、この神画の裏には、趙法秀という法名が記されており、神画の元の所有者の法名だと推測できる。

趙乙昇氏によると、神画を家に迎えた日に、自宅で「合兵合将道場²¹」の儀礼が行われたという。また儀礼の中で、「掛兵」、「請接兵頭」などの小儀礼も行われた。この儀礼を通して、神画は趙乙昇氏の所有物になったということである。

調査の際に、現在現地において1組の神画を新たに制作するのに、約1万元（約178,500円）を要すると聞いた。制作費用を捻出することができないため、破損の激しい神画を使い続けているという。

この組の神画の中に、銘文が記された神画が2点ある。即ち、太位と王姆娘娘神画である。銘文は神画の裏に記されている。太位神画(図7-17-1)の裏に記される銘文は、「主制人趙文学。趙佳保描画。一九八七年十一月十八日。」となる。王姆娘娘神画(図7-22)の裏に記される銘文は、「主制人趙文光。絵画趙佳保。一九八七年十二月初十日。」となる。

「趙文学」と「趙文光」が誰なのか明確ではないが、2点の銘文から、1987年に、「趙文学」と「趙文光」は、「趙佳保」に依頼し、太位と王姆娘娘の神画を描いてもらったことが分かる。銘文の日付からみると、当時、1点の神画を描くのに、約3週間かかったことが推測できる。

張晶晶の口述によると、「趙佳保」は、栗田（地名）の人であり、教員の経験があり、絵が描けたとされる。当時、趙乙昇氏の上屋（同村・同族）の家は、神画を新たに制作するため、「趙佳保」に依頼したとする。その際、趙乙昇氏も太位と王姆娘娘の2点の神画を依頼した。この2点の神画は、上屋の家の所有していた神画を参考にして制作され、開光儀礼もその家の神画と共に済ませたとされる。

この2点の神画は、他の神画と比べて新しいものである。しかも布に描かれているため、破損が全くなく、比較的に良い状態で保管されている。この2点の神画を除き、他の神画は破損が非常に激しく、古いように感じられる。

第8項 広西壮族自治区恭城瑶族自治县三江鄉養牛坪神画

三江鄉養牛坪は、恭城瑶族自治县の東部に位置している。現地の神画は、養牛坪に在住する祭司が所有するものである。2013年11月に、筆者は恭城瑶族自治县で調査した際に、張晶晶の協力の下、祭司の馮法香氏（法名）から、神画の写真データを入手した。神画に関する継承の状況等の情報は、未だ明確ではない。神画は、合計15点15種類ある。名称は以下の通りである。

元始天尊(図8-1)、靈寶天尊(図8-2)、道德天尊(図8-3)、玉皇(図8-4)、聖主(図8-5)、天府(図8-6)、地府(図8-7)、張天師(図8-8)、李天師(図8-9)、馬元帥(図8-11)、王

霊官(図8-12)、海幡(図8-14)、十殿(図8-15)、太尉(図8-17)、庫官(図8-21)²²

第9項 タイ北部ナーン県ムアン郡ナムガオ Nam Ngao 村神画

この神画資料は、2014年1月2日から8日に、タイ北部ナーン県ムアン郡ナムガオ Nam Ngao 村で、実施された掛灯儀礼の調査に参加した際に撮影したものである。

神画は、儀礼を担当する祭司の馮氏(ミエン人)が所有しており、合計17点17種類ある。この神画は、非常に良い状態で保存されており、目立った破損が殆どない。神画の裏に名称及び馮法官という法名が記されている。神画の名称は以下の通りである。

玉清(図9-1)、上清(図9-2)、太清(図9-3)、玉皇(図9-4)、聖主(図9-5)、天府(図9-6)、地府(図9-7)、張天師(図9-8)、李天師(図9-9)、趙元帥(図9-10)、鄧元帥(図9-13)、大堂海幡(図9-14)、拾殿明王(図9-15)、太尉²³、四府功曹・左(図9-24-1)、四府功曹・右(図9-24-2)、大道図

神画を用いて儀礼が行われている家の祭祀場周囲の壁には、細い竹を割った板で神画を掛ける場所が作られる。神画の掛軸には紐が付けられており、儀礼の際に壁の決められた箇所に掛けられる。ヤオ族儀礼の場合は、大量の紙銭を燃やす。この地域では、神画を煙と埃によって汚さないように、一時的に神画を重ねてまとめて掛け、更にその上に布でカバーをする。また儀礼を終えると、神画を祭壇から下ろすが、その際に、所有者は非常に丁寧に神画をひとまとめに巻き、また綿紙と布で包み、布紐で縛って置く。このような丁寧な扱いから、現地の祭司が神画を非常に大切にしていることが感じられる。

神画の中に、元始天尊神画(図9-1)のみ銘文が記されていることを確認できた。銘文は神画の裏に記されており、内容は以下の通りである。

〈銘文〉

馮法官誠心敬請匠人彩畫神像大小堂十七張、功德文銀二十九兩■六錢正、從今以後神像有
灵有聖、保福保佑家主人、日興旺永平安、無災無難喜洋洋、人財兩旺年年進、五谷豐登滿
庫倉、六畜牛馬滿山崗、福寿双全滿家堂、師門興旺利八方、子孫千年萬代應用可也、皇上
民國五年丙辰歲七月、匠人潘德源黃道日開筆大吉利也

〈訳〉

馮法官(法名)は、誠意を持って、匠に請い1組17点の神画を描いてもらった。費用は、
29 兩■6 銭かかった。この後、神画は靈聖を有し、家主の幸福を護り、日々の隆盛と永遠
の平安を護るようになる。災難がなく、喜びが溢れ、人口と財産は年々増え、五穀は倉に
満ちる。六畜牛馬は、山に満ち、福と寿を兼ね備えて家に満ちるように護持する。師匠の
一族はますます隆盛になり、子孫が千年万代にもわたって神画を使えるように護る。皇上

第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

民国5(1916)年7月、絵師潘徳源、黄道吉日に開光儀礼を行い、大変縁起がいい日である。

銘文からは、家主の馮法官が、絵師の潘徳源に願い、29両■六錢の銀で17点の神画を描いてもらったことが分かる。また、神画は1916年7月の吉日に開光儀礼が行われたことも読み取れる。

第10項 台北世界宗教博物館所蔵神画

この神画は、台北の世界宗教博物館に保管されているものである。神画は17点17種類あり、名称は以下の通りである。

元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、玉皇大帝、聖主大帝、天府天王大帝與地府酆都大帝、陽間都祿城隍雨水府付桑大帝、一品張天師、二品李天師、綵壇七十二神、太尉、太慰玄天與其美大將、海番過海、雷庭郊元帥、把壇元帥、渡法海番先師、十殿冥王²⁴

元始天尊神画の裏に、銘文が記されており、内容は以下の通りである。

<銘文>

大清道光貳拾陸年十一月初十家主李法案夫婦二姓誠心請到賓州丹青匠人黃元星/昌兄弟二人彩画滿堂神像一拾三幅典後祈飽和家人丁興旺人口平安十方相請南北來迎五谷香煙不斷馬脚不停資匠倆銀肆兩正

<訳>

清代道光26(1846)年11月10日に、家主の李法案は妻と共に、誠意を持って賓州(広西壮族自治区南寧市賓陽県)の絵師である黄元星と黄元昌に請う。絵師兄弟二人は、1堂13点の神像を描いた。後に、家族が増えるように、平安になるように、十方から相請われて招聘され、南北から迎え、五穀が豊穰になるように、香火が永遠に伝えられるように、馬の脚は止めないように祈る。絵師に4両の銀を払った。

洪莫愁は、「元始天尊神画裏の銘文によると、清道光26年11月10日に、李法案は4両の銀を以て賓州の絵師に頼み、神画を13点描いてもらったということが分かる。また文物商人が付けた神画の資料によれば、李法案は、先に4両の銀で13点の神画を描くように頼んだが、後に、4点の神画を追加したという。従って合わせて17点の神画を注文した。」という。また、「神画毎に、裏面に李法案の法名が書かれている。その中の5点は破損したため、李家の子孫である李法和は、神画を新たに表装した後に、自らの法名を裏面に記した。」という[洪莫愁1999:34-40]。

第11項 南山大学人類学博物館所蔵西北タイ神画

この神画は、白鳥芳郎教授を団長とする上智大学西北タイ歴史文化調査団が、1971年10月中旬より翌72年2月中旬まで、西北タイのチェンライ県で、第二次海外学術調査を実施した際に、チェンライ県にあるバン（盤）・フェイタンというミエンの家から、完全なセットで購入したものだとする[白鳥 1985: 504]。2000年に、上智大学西北タイ歴史文化調査団が収集した全ての資料が、南山大学人類学博物館に移管され²⁵、現在、これらの神画の一部は常設展示室に展示されている。南山大学人類学博物館は、神画に描かれた内容などに関する説明を作成していない。

2014年7月8日に、筆者は南山大学人類学博物館でこのセットの神画資料について調査を実施した。この18点の神画の裏面には、神画所有者の法名及び、それぞれの神画の名称が記されており、また「玉清」神画の裏面にはこのセットの神画の作製された年代及び地域、そしてその神画を祀った所有者の家系姓名も明記されている。以下、神画の裏に記された神画の名称となる。

玉清（図11-1）、上清（図11-2）、太清（図11-3）、玉皇（図11-4）、聖旨（図11-5）、天府（図11-6）、池府（図11-7）、張天師（図11-8）、李天師（図11-9）、趙元帥（図11-10）、鄧元帥（図11-13）、大海翻（図11-14）、拾殿（図11-15）、小海翻（図11-16）、大位（図11-17）、壇（図11-19）、靈皇（図11-28）、大度橋

玉清神画（図11-1）の裏に記された銘文の内容は以下の通りである。

〈銘文〉

法財趙金財合家謫議誠心敬請彩画錦衣恭奉祖宗保佑家堂人丁興旺六畜成群庫滿金銀穀滿倉
錢財牛馬滿山莊更招外処田壕宅児孫為宰上朝堂

皇上光緒三十三年歲次丙午■■■■画■■■月十二日開光吉利榮華貴請広西省思恩府武侯県
永寧郷大漁村潘■■画大小堂十張謝師紅銀貳拾兩六錢正匠保主人増福寿福祿齊天子連孫

〈訳〉

法財、俗名趙金財は一家で協議した上、真心を持ち、謹んで錦衣²⁶を彩画することを願い、祖先を恭しく奉ずる。家の人々を保つように、六畜が群になるように、金と銀が庫に満ちるように、穀物は倉に満ちるように、牛馬は山莊に一杯になるように願う。さらに外から田んぼや住宅を招き、子孫は高官になって朝廷に出るように願う。

皇上光緒33年丙午年²⁷■■■■画■■■月12日に、開光し、縁起がよく、榮華をきわめる。広西省思恩府武侯県永寧郷大漁村の潘■■さんに願い、大小神画を十枚描いてもらった。絵師に感謝する紅銀²⁸はちょうど20両6錢である。家の主人は、幸福になるように、長寿になるように、俸給が天と同じ高さになるように多くなり、子孫が繁栄になるように保つ。

第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

この銘文を解説すると、この18点中10点の神画は、家主の趙金財（法名：法財）が、光緒33（1907）年に絵師に依頼して描かせたものであり、某月の12日に神画の開光儀礼が行われたことも記されている。絵師は、広西省思恩府武侯県永寧郷大漁村に住む潘氏であり、神画を制作するには、20両6銭がかかったことが分かる。また家主は、先祖に対して、家を護ってくれるよう、子孫が増えるように、六畜が群れなすように、金と銀が庫に満ちるように、穀物が豊穰になるように、牛馬が山に満ちるように、子孫が朝廷の高官になれるように、と祈願することも記されている。他の8点の神画に関する情報は、銘文に記されていないため判明しない。

第2節 読み取りの対象と神画内容異同表について

前節で異なるミエン地域から収集した11組の神画資料について紹介した。神画の名称及び神画に描かれている内容によって、全ての神画が27種類に分類でき、即ち、元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、玉皇、聖主、四府、張天師、李天師、把壇師、馬元帥、王靈官、鄧元帥、大海幡、十殿、海幡張趙二郎、太尉、三將軍、総壇、監齋大王、庫官、王姥、大道橋梁、四府功曹、施食、禁齋、太慰玄天與其実大将、家先像神画である。湖南省永州市藍山県所城鎮団源村の神画を除き、他の10組の神画の中に、元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、玉皇、聖主、四府・張天師、李天師、大海幡、十殿、太尉、海幡張趙二郎の12種類と、元帥神が描かれる神画の2種類²⁹が殆ど入っていることが確認できる。本論で取り上げた神画資料ばかりでなく、また大阪の国立民族学博物館に収蔵されるタイ北部のミエンが持っていたセットとなる儀礼神画³⁰、及び *Yao ceremonial paintings* [Lemoine 1982: 46-52]、*Thanh Thờ Các dân tộc thiểu số phía bắc Việt Nam* [Quý Đông Sơn Ngày Nay 2006: 117-132]、*The Yao: The Mien and Mun Yao in China, Vietnam, Laos and Thailand* [Jess G. Pourret 2002: 220-229]などの図録に掲載されたセットとなるミエン儀礼神画からもこれらの種類の神画を確認することができる。よって、これらの種類の神画は、異なるミエン地域が共通して持っている神画であると考ええる。また、この14種類の神画の他に、三將軍、総壇、監齋大王の3種類は、湖南省永州市藍山県・湖南省永州市江華瑶族自治县・広西壮族自治区恭城瑶族自治县のミエン地域において必ず所持されている神画である。以上述べたこれらの神画は、本論での読み取り及び分析の主なる対象となるものである。

神画に描かれている内容に関して、Lemoine は *Yao ceremonial paintings* の中で神々及び脇侍の様子、姿勢、服装の様式・色・模様、持物・冠物等について述べている。Lemoine の読み取りに基づき、本論では神画に描かれる内容を更に細分化して項目に分けた。設定した項目は神画に描かれる主神と脇侍に分け、それぞれの配置、顔の向き、姿勢、持物、冠物、乗物、髪・眉・髭の色、衣服の様式・色・模様等とし、前述した異なるミエン地域の神画資料を11組19種類にわたって項目ごとに表で示した（別冊・表1～表19）。これらの表を通して神画に描かれる内容をミクロな視点から情報を読み取り、異なるミエン地域に用いられている同種の神画に描かれている内容の異同を明らかにしたい。

以下、各表と対照しながら、神画に描かれている内容を詳細に読み取る。なお、神画に描かれ

ている物事及び人物の位置関係を説明する際に、神画に描かれている主神を中心に、主神から見て上・下・左・右・前・後の方向を表す語を用いる。

第3節 異なる過山系ヤオ族(ミエン)地域の同種の神画に描かれる内容の異同

第1項 元始天尊神画に描かれる内容について(別冊・表1)

元始天尊神画に描かれている内容を読み取る前に、まず本論で取り扱っている元始天尊及び靈寶天尊神画の写真資料について一言を加えたい。筆者は現地で神画調査を実施する際に、広西壮族自治区恭城瑶族自治县で行われる儀礼の中で、現地の祭司が、元始天尊神画と靈寶天尊神画を逆に使用していることを確認した。これは神画を祭壇に掛ける際に単に左右の掛け位置を逆にしたという単純な間違いではなく、彼らの認識では両神を逆転して考えている。本論では、その地域の信仰を尊重するため、図6-1・図7-1・図8-1に「元始天尊」、図6-2・図7-2・図8-2に「靈寶天尊」の名称を付けた。しかし、元始天尊と靈寶天尊は同一神ではなく、特徴も異なる。故に本論では、同一神として取り扱うことができない。よって、元始天尊神画の内容を読み解く際に、図6-2・図7-2・図8-2を加えて比較分析を行う。同様に、靈寶天尊神画を読み解く際に、図6-1・図7-1・図8-1を用いる。以下、まず元始天尊に描かれている内容を読み解く。

『道教事典』は、「天尊、道教における最も尊貴な天神の称。三清の元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇といわれる玉皇大天尊、太一でいう太一救苦天尊などがこれである」という[『道教事典』1994:429]。また、「元始天尊、隋唐道教の最高神の名」とされる[『道教事典』1994:128]。

元始天尊神画の全体的な構図としては、中央部に大きく元始天尊像が描かれ、下部の両側に各1人の脇侍が配される。また、図1-1の上部には、元始天尊の号「玉清」が記されている。元始天尊は玉清境を支配する主神であるため、この玉清とは、間違いなく元始天尊を指している。

元始天尊は、御座に座る姿勢で描かれている。上半身及び頭部に円環と炎状の光背が配され、光背の周りに赤色や青色などの瑞雲が描かれている。髪の毛は頭頂で結び、その上に金冠を冠る。鼻の下・耳の下・顎先の3箇所に、やや長い髭を生やす。眉・眼・髪と髭の色は全て黒である。龍袍を着、袍には龍と瑞雲の模様が見える。襟は腰のところで合わせ、下に綬帯を垂らして飾る。襟の合わせたところに、神獣模様のものが見え、帯に付ける魔除けの装身具であると考えられる。

元始天尊の両腕の姿勢に関しては、左腕は内側に約120度曲げ、手首を曲げて立掌しながら手訣を結ぶ。右腕は内側に約60度曲げ、右手は上を向いて手訣を結ぶ姿勢をとる。だが、図1-1の元始天尊の両腕は内側に約60度曲げ、両手は上向きで手訣を結ぶ姿勢をとる。図5-1・図8-2は、左腕は内側に約90度曲げ、左手は上を向き、手に酒杯を持つ。右腕は内側に約120度曲げ、手首を曲げて立掌にしながら手訣を結ぶ姿勢をとる。また、持物に関して、図9-1と図11-1は、元始天尊は右手に酒杯を持つと描かれている。

元始天尊が着ている龍袍の色に関しては、主に黒色で描かれているが、他には赤色と深緑など

第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

の色も見られる。図 1-1 の元始天尊は赤色の龍袍を着、図 7-1 は黄緑色の龍袍を着、図 8-1 は灰色の龍袍を着る。

元始天尊の御座は、龍座と鳳座がある。図 1-1 の元始天尊の肩の両側には、口に宝珠を咥えている白い鳳凰の首が見える。これは元始天尊の御座の背もたれにつけられた飾り物であると考えられる。また、図 9-1、図 10-1、図 11-1 には龍首の飾り物が見える。

元始天尊の下部の両側に、光背を配した中央に向いている脇侍がそれぞれ立っている。脇侍は男女があり、必ずしも男女を揃えて描かれているわけではなく、二人とも男の脇侍、あるいは二人とも女の脇侍であることも見られる。女の脇侍なら、雲帔という肩かけをし、裙を穿く、両手は胸の前に出し、供物を盛る円盆を持つ。男の脇侍なら、文官と武官の区別があるが、文官は袍を着、両手を胸の前に合わせ、手に圭を持つ。武官は、鎧あるいは武将の袍を着、頭に兜あるいは武官の冠を冠り、手に鞭や錘などの法具を持つ。

神画の背景として瑞雲が描かれている。図 9-1、図 10-1、図 11-1 には、さらに華蓋が加えられている。図 11-1 の華蓋の両側に、更に鳳凰が描かれている。

元始天尊神画を含む三清神画の読み取りについて、神画研究第一人者である Lemoine は、次のように述べている。

三清はいつも彼らのそれぞれの位置にある。注目するのは、二人の玉の従者は元始の銘板を囲むことである。また、道德は一人の男性と一人の女性を持っており、靈寶は二人の男性を持っている（一人は文官、一人は軍人）。縁起の良い言葉は、このシリーズでは、各画像の上部に表示される。左から右に読むと、五福（道德の上部）、福と寿（元始の上部）、康と寧（靈寶の上部）である。[Lemoine 1982:53]

文中の元始天尊・靈寶天尊・道德天尊神画は一柱の主神と二人の脇侍で構成されているという構図は、筆者が収集した三清神画の構図と同じである。但し、神画の上部に表示された文字という点は、筆者が収集した神画の剥離が激しいため、元来上部には何が書かれていたかについてはほとんど識別不能である。複数の元始天尊神画から文字が確認できたのは1点（図 1-1）あり、「玉清」という元始天尊の号が書かれているが、縁起の良い言葉は書かれてなかった。

また、元始天尊の持物に関して、Lemoine は、次のように述べている。

元始は、一般に一つの手に不死の丸薬を持ち、もう一つの手は手訣の仕草をする。場合によって不死の丸薬（老君の秘薬）は小さい器に入っている。多くの場合、手に何も持っていないように見えるが、薬物が手のひらの中に隠されているか、あるいは画家が追加するのを忘れたからである。[Lemoine 1982:57]

文中の「不死の丸薬」は筆者の収集した複数の元始天尊神画には描かれておらず、手に何も持っていないか、たとえ持っていたとしても多くは酒杯を持つ。「丸薬」と手に何も持っていないという

点について、『道教大辞典』では次のような記述もある。

元始天尊は、一般に道教三清殿の中央に奉じられ、頭部に円形の光が覆い、手に丹丸（丸形の練薬）を持ち、あるいは左手は虚しく捻り、右手は虚しく捧げる姿勢となす。この姿勢は、「天地未形、万物未生³¹」時の「無極³²」を表している。[『道教大辞典』1994:169]。

ここでは、まず、元始天尊の手に持っている薬は不死かどうか問わず、丸形の練薬が同様である。それから、Lemoine の見解と『道教大辞典』の記述とは、なぜ元始天尊の手に何も持っていないかについてかなり相違している。Lemoine の「不死の丸薬が手のひらの中に隠されているか、あるいは画家が描くのを忘れたからである」という解釈は適切ではない。手に物を持っていないこと自体が特別な意味を持っており、『道教大辞典』に記されたように、「天地未形、万物未生」時の「無極」を表している。Lemoine の見解が間違っていると考える。

第2項 靈寶天尊神画に描かれる内容について（別冊・表2）

『道教事典』によれば、「靈寶天尊、三清境（三天）の一つの上清境（禹余天）の主神」という[『道教事典』1994:612]。

靈寶天尊神画全体的な構図としては、靈寶天尊像は中央部に大きく描かれ、下部の両側に二人の脇侍が描かれる。図1-2、図2-2-1、図2-2-2の上部には、文字が記されており、図1-2は「左禄清」と記されているが、図2-2-1と図2-2-2は剥離しているため、読み取れなかった。図1-2には、「左禄清」とあるものと「上清」とはっきり書かれてはいないが、絵師は靈寶天尊の号を示したかったのではと考える。

靈寶天尊は、左腕は内側に約120度曲げ、手首を曲げて立掌しながら手訣を結び、蓮華を持っている。右腕は内側に約60度曲げ、右手は上向きで蓮華の柄を支え、御座に座る姿である。だが、図1-2の靈寶天尊は団扇を持っており、図6-1・図7-1・図8-1の元始天尊は左手に如意を持っている。

靈寶天尊の上半身と頭部に円環と炎状の光背を配する。髪の毛は頭頂で結び、その上に金冠を冠る。鼻の下・耳のした・顎先の三箇所、やや長い鬚を生やす。眉・眼・髪と鬚の色は全て黒である。緑色の龍袍を着、袍の模様は龍と瑞雲である。襟の合わせたところに、神獣模様の装身具が見える。その下に綬帯を垂らして飾る。

靈寶天尊が着ている龍袍の色に関しては、主に緑色及び深緑色で描かれているが、図4-2のように紺色の龍袍を着ると描かれるのも見られる。

靈寶天尊の御座は、龍座が見える。図1-2、図10-2、図11-2に描かれている靈寶天尊の肩の両側には、御座の背もたれにつけられた龍首の飾り物が見える。

靈寶天尊の下部の左右に、光背を配した男女脇侍がそれぞれ立っている。神画に向かって脇侍は左側に向いている。靈寶天尊神画に描かれている男女の脇侍は、元始天尊神画と同様の装束を

第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

している。また、図5-2、図9-2、図10-2の下部に描かれている男脇侍の後ろには龍が見える。

神画の背景として瑞雲が描かれている。図2-2-1、図2-2-2、図9-2、図10-2、図11-2には、さらに華蓋が加えられている。図11-1の華蓋の両側に、更に鳳凰が描かれている。

靈寶天尊の持物について、Lemoine は次のように述べている。

靈寶天尊の左手に常に如意タイプの仏教の権杖を持っていると見える。右手も権杖を支えるか、あるいは手訣の仕草をする。18世紀後期及び19世紀初頭、中国南部の画家は如意権杖に精通していない可能性ある。そして彼らの作品では、如意権杖が長期間にわたって蓮華になってきた。[Lemoine 1982: 60]

本論が用いた複数の靈寶天尊の神画には、靈寶天尊は手に如意ではなく、蓮華を持って描かれている。蓮華が、Lemoine が述べるように如意から発展したかどうか、またどのような意味を持っているのかは、未だに判明していない。靈寶天尊は道教の神として、手に太極図あるいは如意を持つ[『道教大辞典』1994: 595]が、しかしミエン儀礼神画に描かれる場合は、蓮華に変化している。ミエンは道教の神々を自分の中に取り入れ、さらに自己の独自の解釈を加えたと考える。靈寶天尊が蓮華を持って描かれることはその一例であると考ええる。

靈寶天尊と元始天尊(本節第1項)神画を読み取ると、二神の基本的な特徴は非常に似ているという点がある。それについて、Lemoine が次のように指摘している。

彼らの顔は非常に似ているので、初めて神画を見ると、元始と靈寶を区別することが困難である。[Lemoine 1982: 61]

前項と本項で元始天尊と靈寶天尊神画に描かれている内容の分析によって、筆者は、一目でこの二神を区別できる方法は、神の着ている衣服の色と、神画の下部に描かれている脇侍の向きと、銘文の有無を確認することであると考ええる。具体的にいうと、黒色の龍袍を着ているのは元始天尊であり、緑系の色の龍袍を着ているのは靈寶天尊である。脇侍が中央に向いているのは、元始天尊神画であり、脇侍が向かって左側に向いているのは、靈寶天尊神画である。銘文が書かれているのは元始天尊神画であり、書かれていないのは靈寶天尊神画である。ただし、この方法は必ず全てに通用するというわけではない。広西恭城瑶族自治县のように逆用される状況もあるので、元始天尊神画と靈寶天尊神画を区別する際に、現地の状況と神画の儀礼における使用習慣をよく調べなければならないと考える。

第3項 道德天尊神画に描かれる内容について(別冊・表3)

『道教事典』によれば、「道德天尊、中国における道教の神。三清の天界のうち、太清天に住まって、玉清天に住まう元始天尊、上清天に住まう靈寶天尊とともに、道教三尊、あるいは三宝

と称する」という[『道教事典』1996: 461]。

道德天尊神画の全体的な構図としては、神画の中央部に道德天尊像が大きく描かれ、下部両側に二人の従者が描かれている。図1-3と図2-3の上部には、文字が書かれているが、剥離したため、どのような文字が書かれているのかについて不明である。

道德天尊は御座に座る姿勢であり、右腕は内側に約120度曲げ、手首を曲げて立掌しながら手訣を結び、団扇を持っている。左腕は内側に約60度曲げ、手は上向きで手訣を組み団扇の柄を支える。

道德天尊の上半身と頭部に円環と炎状の光背を配し、髪の毛は頭頂で結び、その上に金冠を冠る。鼻の下・耳のした・顎先の三箇所に、やや長い鬚を生やす。眉・眼・髪と鬚の色は全て白である。藍色の龍袍を着、袍の模様は龍と瑞雲である。但し、図2-3、図10-3、図11-3に描かれている道德天尊の龍袍は紺色であり、図4-3と図6-3は緑色であると見える。龍袍の襟の合わせたところに、神獣模様の装身具が見え、その下に綬帯を垂らして飾られている。

道德天尊の御座は、龍座が見える。図1-3、図10-3、図11-3に描かれている道德天尊の肩の両側には、御座の背もたれにつけられた龍首の飾り物が見える。

神画下部の両側に、光背を配す男女の脇侍がそれぞれ立っている。二人とも向かって右を向いているが、図4-3に描かれている脇侍は向かって左を向いている。道德天尊神画に描かれている男女の脇侍は、元始天尊神画及び靈寶天尊神画と同様の装束をしている。

注目すべきは、道德天尊神画(図5-3、図6-3、図9-3、図10-3)に描かれている男脇侍の後ろには虎が見え、1-3の男脇侍の左肩の上に龍が見える点である。また靈寶天尊神画(図5-2、図9-2、図10-2)に描かれる脇侍の後ろにも龍が見える。靈寶天尊と道德天尊神画を合わせてこの点について、Lemoineは *Yao ceremonial paintings* の中で、「一匹の虎は、道德の従者たちの間にいる。そしてバランスを取るには靈寶の従者たちの間に一匹の龍がいる。虎と龍は、それぞれに西方と東方を象徴する」[Lemoine 1982: 61]と述べている。虎と龍はそれぞれに東方と西方を象徴するという見解について、筆者は理にかなっていると考え。なぜならば、三清神画を祭壇に掛ける際に、元始天尊神画は中央に、元始天尊から見て左側に靈寶天尊神画、右側に道德天尊神画を配置する。左の方位は東方と対応し、守護する神獣は青竜である。右の方位は西方と対応し、守護する神獣は白虎である。左側に掛けられる靈寶天尊に描かれている龍と、右側に掛けられる道德天尊に描かれている虎を見ると、自然に青龍と白虎を連想するが、過山系ヤオ族(ミエン)の人々がそのように理解して、神画を描かせたかどうかは分からない。

過山系ヤオ族(ミエン)が東西南北と虎・龍等との関連を理解しているかどうかについて疑問がある。筆者の見解は、脇侍の後ろに描かれている虎と龍はその脇侍は誰であるかを識別するシンボルであると考え。なぜならば、趙金付氏が所有している書表書(伝度用)というジャンルの儀礼文献の中に、『■■二十七年彩画三清大開光伝度陽陰加職補充用』³³ という題名のものがある。中には、三清及び三清の脇侍たちについて、次のような記述がある。

〈前略〉

又開出三清鬼名元始天尊

周趙元年正月十五日辰時生姓胡釈迦仏出世

元始天尊脚下南北二斗星君

靈寶天尊周趙二年四月二十四日辰時出生姓沈

靈寶天尊脚下龍元帥献花玉女七月二十五日午時

道德天尊姓李脚下虎元帥献花祐女

〈後略〉

〈訳〉

また、三清の神が出る。名は元始天尊である。

元始天尊は周趙元年1月15日辰時に生まれ、胡姓である。釈迦仏の生まれ変わりである。

元始天尊の脚下に南斗星君と北斗星君を並べている。

靈寶天尊の脚下に龍元帥と献花玉女を並べている。7月25日午時の生まれである。

道德天尊は李姓である。脚下に虎元帥と献花祐³⁴女を並べている。

ここには、三清神の生年月日と苗字、及び脇侍の名称が記されている。注目したいのは、三清神の脇侍である。元始天尊の脇侍は南斗星君と北斗星君であり、靈寶天尊の脇侍は龍元帥と献花玉女であり、道德天尊の脇侍は虎元帥と献花祐女である。この二人ずつの脇侍は恐らく三清神画に描かれている脇侍であろう。特に神画から読み取れた情報によると、道德天尊と靈寶天尊神画に描かれている男の武将装束の脇侍の後ろに虎と龍が描かれており、女の脇侍は手に花を持っている。このように神画に描かれていることは『■■二十七年彩画三清大開光伝度陽陰加職補充用』に記されている内容と一致している。故に、靈寶天尊神画の下部に描かれている脇侍は龍元帥と献花玉女であり、道德天尊神画の下部に描かれている脇侍は虎元帥・献花玉女であり、龍と虎は二人の將軍のシンボルであると考えられる。

神画の背景として瑞雲が描かれている。図9-3、図10-3、図11-3には、さらに華蓋が加えられている。図11-3の華蓋の両側に、更に鳳凰が描かれている。

元始天尊と靈寶天尊と比べ、道德天尊は非常に識別しやすい神である。なぜならば、道德天尊は髪の毛が白い老人像だからである。また彼の手を持っている団扇も識別するシンボルの一つである。この団扇について、Lemoineは、*Yao ceremonial paintings*の中で、「靈寶の左手に持つ権杖とのバランスを取るため、道德の右手に日と月の紋様の団扇を持っている」という[Lemoine 1982: 60]。しかし、筆者の収集した複数の道德天尊神画には、Lemoineが述べた日月紋様の団扇はなかった。また、吉野晃から得た知識であるが、「タイのミエンの村で酒を飲んで赤ら顔になると、『道德天尊のようだ』と戯れ言を言い合っていたものである。顔が薄紅いことも道德天尊の特徴の一つである」という。本論で取り扱う道德天尊の顔色を見ると、タイ北部から集めてきた図9-3と図11-3に描かれている道德天尊は確かに元始天尊と靈寶天尊の顔色より赤く見える。それ以外の地位域の道德天尊神画はこいう特徴に関してあまり目立たな

い。

第4項 玉皇神画に描かれる内容について (別冊・表4)

『道教事典』によれば、「玉皇大帝、宋代以降の中国民間諸神中の最高神。玉皇・昊天玉皇・天帝などともいわれる」という[『道教事典』1994: 105]。

玉皇神画全体的な構図としては、玉皇像は中央部に大きく描かれ、下部の両側に二人の脇侍が描かれる。図1-4と図6-4の上部には、文字が記されており、図6-4は「玉皇左」と記されているが、図1-4は剥離しているため、読み取れなかった。

玉皇は御座に座る姿勢で描かれている。上半身及び頭部に円環と炎状の光背が配され、光背の周りに瑞雲が描かれている。頭に帝王を象徴する冕を冠り、冕の両側に旒³⁵が描かれている。鼻の下・耳の下・顎先の3箇所やや長い髭を生やす。眉・眼・髪と髭の色は全て黒である。玉皇は黄色の龍袍を着、袍の模様は龍と瑞雲である。但し、図2-4に描かれている玉皇の龍袍は黒色であり、図5-4は赤色である。また図1-4の龍袍には、瑞雲しか描かれていない。袍の襟は腰のところで合わせ、下に綬帯を垂らして飾る。図11-4は、襟の合わせたところに、さらに帯に付ける神獣模様の装身具が描かれており、神獣の額に「王」という字が書かれている。

玉皇の両腕は、内側に約90度曲げ、両手を胸の前で合わせ、手に圭を持つと描かれている。図6-4に描かれている玉皇の手には圭を持っていない。また図1-4、図2-4、図6-4、図9-4、図11-4の玉皇の両手は袖の中に隠れて見えないが、図4-4、図5-4、図7-4、図8-4、図10-4の玉皇の両手は袖から出している。

玉皇の御座は、龍座が見える。図9-4、図10-4、図11-4に描かれている玉皇の肩の両側には、御座の背もたれにつけられた龍首の飾り物が見える。

玉皇の下部の左右に、光背を配した脇侍がそれぞれ立っている。図3-4、図4-4、図5-4、図6-4、図7-4、図8-4の脇侍は、二人とも中央に向いているが、図1-4、図9-4、図10-4、図11-4の脇侍は向かって左に向いている。脇侍は男が圧倒的に多いが、図6-4に描かれている二人の脇侍のみ女である。女の脇侍は冠を冠り、袍を着、裙を穿き、両手胸の前で合わせて圭を持ち、女官の装束となっている。男の脇侍は、文官と武官の区別がある。文官は袍を着、両手を胸の前に合わせ、手に圭を持つが、図4-4と図4-5に描かれ脇侍の手には書物のようなものを持っている。武官は、武将の袍を着、頭に兜あるいは武官の冠を冠り、手に鎗などの法具を持つ。また図6-4の二人の脇侍の間の方には、牌位のようなものが描かれているが、そこに文字は記されていない。また図8-4の脇侍の間の方には、赤い帽子を冠っている半裸の小さい人が描かれており、この小人は左腕を頭の上に上げる姿勢となる。

神画の背景として瑞雲が描かれている。図2-4、図9-4、図10-4、図11-4には、さらに華蓋が加えられている。図11-1の華蓋の両側に、さらに鳳凰が描かれている。

神画に描かれている玉皇について、Lemoineは、次のように述べている。

ヤオ族の絵の中で、中国の彫刻と絵のように、玉皇は天蓋付きの王座に座り、皇帝の龍袍を着ると示されている。彼の頭の上に、上に板を載せた皇帝風の冕を冠り、真珠の旒は前部及び後部に垂れ下がっている。玉皇の手を交差して圭を持っている。[Lemoine 1982: 65]

筆者が収集した複数の玉皇神画に描かれている玉皇の姿勢・服装・冠物などは、Lemoine が述べたこととほぼ一致する。

第5項 聖主神画に描かれる内容について (別冊・表5)

聖主神画全体的な構図としては、聖主像は中央部に大きく描かれ、下部の両側に二人の脇侍が描かれる。図2-5と図6-5の上部には、文字が記されており、図6-5は「聖主右」と記されているが、図2-5は剥離しているため、読み取れなかった。

聖主は御座に座る姿勢で描かれている。上半身及び頭部に円環と炎状の光背が配され、光背の周りに瑞雲が描かれている。頭に帝王を象徴する冕を冠り、冕の両側に旒が描かれている。鼻の下・耳の下・顎先の3箇所やや長い髭を生やす。眉・眼・髪と髭の色は全て黒である。聖主は黒色の龍袍を着、袍の様子は龍と瑞雲である。但し、図1-5、図5-5、図7-5に描かれている聖主の龍袍は黄色であり、図4-5、図6-5、図8-5は赤色である。また図1-5の袍には、梅花の様子が描かれているが、2-5の袍には、瑞雲しか描かれていない。袍の襟は腰のところで合わせ、下に綬帯を垂らして飾る。図11-5は、襟の合わせたところに、さらに帯に付ける神獣模様の装身具が描かれており、神獣の額に「王」という字が書かれている。

聖主の両腕は、内側に約90度曲げ、両手を胸の前で合わせ、手に圭を持つと描かれている。図2-5、図9-5の聖主の両手は袖の中に隠れて見えないが、他の神画に描かれている聖主の両手は袖から出ている。

聖主の御座は、龍座が見える。図10-5、図11-5に描かれている聖主の肩の両側には、御座の背もたれにつけられた龍首の飾り物が見える。

聖主の下部の左右に、光背を配した脇侍がそれぞれ立っているが、図1-5は他の聖主神画と異なり、下部の左右にそれぞれ二人の脇侍が描かれている。図1-5、図4-5、図5-5、図6-5、図7-5、図8-5の脇侍は、中央に向いているが、図2-5、図9-5、図10-5、図11-5の脇侍は右に向いている。脇侍は全て男性であり、文官と武官の区別がある。文官は袍を着、両手を胸の前に合わせ、手に圭を持つが、図1-5に描かれている文官装束の脇侍は花や枝等の供物を持ち、図7-5の脇侍は書物のようなものを持っている。武官は、鎧あるいは武将の袍を着、頭に兜あるいは武官の冠を冠り、手に剣などの法具を持つ。また図8-5の脇侍の間の下方には、赤い帽子を冠っている半裸の小さい人が描かれており、この小人は左腕を頭の上に上げる姿勢となる。

神画の背景として瑞雲が描かれている。図9-5、図10-5、図11-5には、さらに華蓋が加えられている。図11-5の華蓋の両側に、さらに鳳凰が描かれている。

以上、複数の異なるミエン地域の玉皇神画と聖主神画に描かれている内容の異同について詳細

に見てきたが、この二神は前述した元始天尊と靈寶天尊のように、基本的な特徴が非常に近いということが分かる。一目で区別できる方法は、袍の色と脇侍の方向であると考ええる。黄色の龍袍を着ているのは玉皇、黒色の龍袍を着ているのは聖主である。また脇侍が向かって左に向いているのは、玉皇神画であり、脇侍が向かって右側に向いているのは、聖主神画である。

玉皇と聖主の特徴について、Lemoine は、次のように述べている。

両方の特徴と身振りは通常同じである。彼らの間の唯一の違いは、彼らの衣の色である。
玉皇は黄色で、聖主は緑色である。[Lemoine 1982 : 65]

しかし、*Yao ceremonial paintings* に載っている聖主神画の写真³⁶から見ると、聖主の衣の色は黒色であり、Lemoine が述べた緑色ではなかった。この点について、Lemoine が読み間違っている可能性があると考えられる。

第6項 四府神画に描かれる内容について (別冊・表6, 表7)

過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画の中で、四府が描かれている対となる2点の神画がある。1点の神画にはそれぞれ二神が描かれ、合わせて天府・地府・水府・陽間の四神が描かれる。*Yao ceremonial paintings* によると、タイではこの種類の神画において、天府と地府を1点に、陽間と水府を1点にまとめて描かれるとされる[Lemoine 1982]。しかし、湖南省永州市藍山県・同省の江華瑶族自治县・広西壮族自治区恭城瑶族自治县で、この2点の神画はそれぞれ「天府」と「地府」と呼ばれるため、天府と地府の二神が1点の神画にまとめて描かれていない可能性があると考ええる。また、神画に描かれる四神の服飾・姿勢・冠物・持物は非常に近似するため、具体的にどの神が天府・地府・水府・陽間であるかはつきりと区分できないものである。よって、本論では、この種の神画に対して、「四府」神画という語を用いる。対となる2点の神画に描かれる内容を読み取る際に、「四府(左)」と「四府(右)」の語を用いる。神画に描かれている神々の向き方向から区別すると、向かって右を向いているのは「四府(左)」で、向かって左を向いているのは「四府(右)」である。

6-1. 「四府(右)」に描かれる内容について(表6)

四府(右)神画の全体的な構図としては、主神の二神がそれぞれに神画の上部と下部に描かれ、主神の後ろには脇侍が配される。図7-6の上部には、「天府右」と書かれている。また図1-6と図2-6の上部は剥離したため、文字が書かれているかどうかは確認不能である。

まず上部に描かれている主神を見よう。主神は、向かって左に向いており、頭部に円環形の光背が配され、立ち姿勢あるいは御座に座る姿勢で描かれている。頭に帝王を象徴する冕を冠っており、冕の両側に旒が垂れ下がり、描かれた旒の本数は1本から3本まであり、完全に一致する

ものがない。また図 5-6、図 7-6、図 8-6、図 9-6、図 11-6 の冕の両側には旒が描かれていない。

主神の眉・眼・髪と髭の色は全て黒色であるが、1-6 の上部に描かれている主神の髪と髭は赤色である。主神は主に黄色の帝王式の袍を着るが、また赤色・藍色のも見られる。図 4-6、図 9-6、図 11-6 は赤色、図 5-6 と図 6-6 は藍色である。袍は主に瑞雲や花などの模様が描かれるが、また図 6-6 のように龍の模様が描かれているのも見られる。

主神の両腕は、内側に 90 度曲げ、両手を胸の前で合わせ、手に圭を持っている。しかし、図 9-6 と図 11-6 に描かれている主神の姿勢は異なっており、右手は顔の前に上げて手訣を結び、左手は袖に隠しており、両手には何も持っていない。

主神の後ろに、旗を掲げる脇侍（一人）がいる。図 4-6、図 5-6、図 6-6 は、主神の後ろの両側に各一人の脇侍が描かれており、向かって右側の脇侍は旗を掲げ、向かって左側の脇侍は文書のようなものを持っている。脇侍は全て男性で、文官あるいは武官の装束をしている。但し、2-6 に描かれている旗を掲げる脇侍はどちらでもなかった。彼は西遊記中の哪吒のように、頭の上に二つに結び分けた髻を結び、子供の装束である。脇侍らは主神と同じ向き方向で、向かって左へ向いた立ち姿勢である。以上は神画上部に描かれている主神と脇侍らである。

次に、神画下部に描かれている主神と脇侍を見よう。神画下部に描かれる主神は、上部の主神の姿勢や装束などと比べてほぼ同じである。向かって主神は左へ向き、頭部に円環形の光背が配され、立ち姿勢あるいは御座に座る姿勢で描かれている。頭に帝王を象徴する冕を冠っている。

主神の眉・眼・髪と髭の色は全て黒色である。主に赤色の帝王式の袍を着るが、また紺色・緑色・藍色の袍も見られる。図 4-6 は紺色、図 6-6、図 7-6、図 8-6 は藍色、図 2-6 と図 11-6 は緑色である。神画下部に描かれる主神は、上部に描かれる主神の両腕の姿勢と同様で、手に圭を持っている。

神画下部に描かれる主神の周囲に一般的には脇侍が描かれませんが、図 5-6、図 7-6、図 8-6 には旗を掲げる鬼形の脇侍が見られる。鬼の脇侍は帽子を冠らず、袴を穿き、腰巻を巻く姿となる。また図 5-6 の鬼は服も着ておらず、半裸の姿で描かれている。

神画の背景として、一般的に瑞雲が描かれるが、四府(右)の場合は、神画の下部の左側あるいは右側に、官府の方隅が見られる。そこには、テーブルが描かれ、上に筆置きや紙などのものが置かれ、テーブルの後ろに官員と役人模様の人が描かれている。さらに、図 4-6、図 6-6、図 9-6、図 10-6、図 11-6 には、テーブルの手前側に、箱とひとつながりの銅銭を担いで笠を冠る庶民装束の人が見られる。さらに、図 10-6 に、この人の名が記されており、「運財童子」である。

6-2. 四府(左)神画に描かれる内容について(表 7)

前述したように、この種類の神画は対となるものである。そのため、四府(左)神画は四府(右)神画が逆転したように見られ、神画に描かれている神々及び脇侍の特徴や、神画の背景などもほぼ一致している。重複のように見えるかもしれないが、四府(左)神画に描かれている内容を読み取る。

第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

四府(左)神画の全体的な構図としては、天府神画と同様で、主神の二神がそれぞれに神画の上部と下部に描かれ、主神の後ろには脇侍が配される。神画の上部には、ほとんど字が記されていないが、但し、図1-7、図2-7、図6-7の上部に、「地府左」(右から左へ)と書かれている。

まず上部に描かれている主神を見よう。主神は向かって右を向いているが、図7-7と図8-7の主神は向かって左を向いている。主神の頭部に円環形の光背が配され、立ち姿勢あるいは御座に座る姿勢で描かれている。主神の眉・眼・髪と髭の色は全て黒色である。頭に帝王を象徴する冕を冠っており、冕の両側に旒が描かれている場合があり、描かれていない場合もある。

身に帝王式の袍を着、袍の色は黒色・緑色・赤色あり、図1-7、図2-7、図4-7は黒色、図5-7、図6-7は緑色、図7-7、図8-7、図9-7、図10-7、図11-7は赤色である。袍には瑞雲や花などの模様が描かれる。

主神の両腕は、内側に90度曲げ、両手を胸の前で合わせ、手に圭を持っている。だが、図9-7と図11-7に描かれている主神の姿勢は異なっており、右手は顔の前に上げて手訣を結び、左手は袖に隠しており、両手には何も持っていない。同じの姿勢は、図9-6と図11-6の天府神画からもみられる(本節第6-1.四府(右)の項参照)。これらの対となる天府と地府神画は、異なる地域のものであるけど、どちらもタイ北部の過山系ヤオ族(ミエン)が所有していたものである³⁷。他のミエン地域から収集した天府と地府神画からこのような神々の姿勢がみられないことによって、タイ北部のミエン儀礼神画の一つの特徴を見出すことができるのではないかと考える。

主神の後ろに、旗を掲げる一人の脇侍が立っている。だが、図4-7、図6-7、図7-7、図8-7には、主神の後ろの両側に各一人の脇侍が描かれており、一人の脇侍は旗を掲げ、もう一人の脇侍は文書のようなものを持つか、あるいは持たない。脇侍は全て男性で、天府神画に描かれている文官と武官の装束とはほぼ同様である。また、脇侍らは主神と同じ向き方向に向いている。以上は神画上部に描かれている主神と脇侍らである。

次に、神画下部に描かれている主神と脇侍を見よう。神画下部に描かれる主神は、上部の主神の姿勢や装束などと比べてほぼ同じである。主神は向かって右を向き、頭部に円環形の光背が配され、立ち姿勢あるいは御座に座る姿勢で描かれている。頭に帝王を象徴する冕を冠っている。

主神の眉・眼・髪と髭の色はほとんど黒色であるが、図5-7の下部の主神は、白い眉・髪・髭の老人像として描かれている。また、図6-7の下部の主神の眉・髪・髭は、真っ赤である。また、図9-7の下部の主神の眉・髪・髭は白色であるが、顔は龍の模様であり、額に「王」字が書かれており、西遊記中の龍王のような装束で描かれている。龍王は海神であるため(窪 1986:245-246)、ここでは水府を表していると考えられる。

主神は帝王式の袍を着、袍の色は赤色・緑色・紺色・藍色・黒色がある。図4-6は紺色、図6-6、図7-6、図8-6は藍色、図2-6と図11-6は緑色である。神画下部に描かれる主神は、上部に描かれる主神の両腕の姿勢と同様で、手に圭を持っている。

神画下部に描かれる主神の周囲に一般的には脇侍が描かれないが、図2-7、図5-7、図7-7、図8-7には旗を掲げる脇侍が見られる。各神画に描かれているこの脇侍は、武官の装束(図5-7)、鬼の装束(図7-7、図8-7)、また子供のような装束(図2-7)³⁸となっている。

第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

四府(左)神画の背景と四府(右)神画の背景はほぼ同じである。神画下部の右側に、官府の片隅が見られる。そこには、テーブルが描かれ、上に筆置きや紙などのものが置かれ、テーブルの後ろに官員と役人模様の人が描かれている。図4-7、図6-7、図9-7、図10-7、図11-7には、「運財童子」が描かれている。さらに図9-7と図11-7は、「運財童子」の足の下に細い道や階段のようなものが描かれており、届き先の官府へ行く道と階段であると考えられる。

本項では、四府(右)と四府(左)神画に描かれている内容の読み取りにより、この種の神画に描かれている四神の基本的な特徴と姿勢は非常に類似することが分かった。図9-7に描かれている龍王形の水府を除き、その以外の神々は目立つ特徴がつかめないため、天府・地府・陽間・水府の四神は一体誰なのかを見分けるのが非常に困難である。台北世界宗教博物館に収蔵されている神画のように、各々神の名称が明記されているにもかかわらず、四神を見分ける方法を見つけれない。

また、脇侍の装束によって、四神を見分けようも考えた。例えば、神画には、主神の後ろに立つ脇侍は鬼の装束として描かれると見られる。鬼を見て地獄を連想するので、神画に描かれる主神は、地獄の長官である酆都北陰大帝ではないかと推察する³⁹。絵師は鬼を描くことを通して地府を表していると考えられる。しかし、天府・陽間・水府はこの方法で見分けることができなかった。

神画に描かれる天府・地府・陽間・水府に関する描写は、Lemoine は次のように述べている。

天の総督(天府)は、いつも黄色の袍を着、皇帝風の帽子を冠る。彼は筆と祝福の言葉が書かれた銘文を持って示している。[Lemoine 1982 : 101 PL. 156]

地の総督(地府)は、横たわった虎に着座して示されている[Lemoine 1982 : 101-102 PL. 158; PL. 160]。総督画像の足のところで、二つ目の宝庫が見られる。図162における銘文は「国民の富の宝庫」としてその名を与えた。そしてその閉じた二重扉に「宝庫を繁栄し、金や玉を盛り上げる」と読み取れた。[Lemoine 1982 : 101-102 PL. 158; PL. 162]

水の総督(水府)はいつも赤い袍を身に着けている。＜中略＞彼は横たわった龍の背に着座している[Lemoine 1982 : 98 PL. 148]。もっと重要なのは、水の総督絵画の一番下に示されている小さな光景である。三階建ての建物のようなものが見られ、ドアのそばに、あるいは彼のオフィスで役人風の人が待機している。これは右の宝庫であり、そしてそのお金は「運銭童子」によってもたらされる。彼は紐で繋いだ銅製の現金を負荷し、半肩に吊り下げている。[Lemoine 1982 : 98-99 PL. 145-146]

威厳があるこの世の皇帝(陽間)は、高級官吏の太尉が冠る帽子と同じようなもの、また玉皇や聖主のような真珠の旒が付く皇帝の帽子のようなものを冠ってと描かれている。彼は時々赤い袍を着、太尉のようである。あるいは黄色の袍を着、玉皇のようである。兵士

第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

は彼の旗を運ぶ。一人の女性の脇侍は金色のシルクの布に包まれた贈り物を持ち歩く。図138中、彼は右手に筆を持つと示されている。彼はちょうど銘文を書いた。銘文は、「宝物や穀倉があふれて充填するかもしれないように、私は自分の祝福を下に送る。この縁起の良い予兆を喜び、玉を受け、及び金が提供される。」と書く。[Lemoine 1982 : 97 PL. 138]

文中の天府・地府・陽間・水府の描写から、Lemoine が取り扱う神画に描かれているこの四神の、頭に冕を冠って身に皇帝式の袍を着るという基本的な特徴（頭に冕を冠って、皇帝の服装）は、筆者が収集した神画と比べてほぼ同じである。それから水府神画に描かれている、三階建ての建物とその建物で待機している役人のような人物、及びお金を運ぶ「運財童子」は、筆者が取り扱う神画からも見られる。

しかし、異なる点も幾つか見られる。第1の点は、神画に描かれている四神の姿勢である。筆者が分析した神画の中、天府・地府・水府・陽間の四神は、両手を胸の前で合わせて圭を握るが、Lemoine が述べたような天府・地府・陽間が手に筆を持ち、銘文を示しているというシーンは見られない。

第2点は、神が動物に乗ることである。筆者が取り扱う神画の中の四神は、立つあるいは御座に座る姿勢として描かれるが、動物に乗る姿勢は一つもない。Lemoine は地府と水府はそれぞれ横たわった虎と龍に乗っているとするが、*Yao ceremonial paintings* に掲載された神画をよく見ると⁴⁰、地府が乗っているのは確かに虎であるが、水府が乗っている動物は龍ではなく、獅子である。この点においては、Lemoine は読み間違えている。

第3点は、脇侍が持つ旗に縁起の良い言葉が書かれることである。第4点は神画に宝庫が描かれることである。筆者が取り扱う神画にはこれらの祝言と宝庫が見られない。

以上 Lemoine と筆者の取り扱う神画の内容の異同について考察した。神画全体の構図と神画に描かれる神々の様子はほぼ同じである。

第7項 張天師神画に描かれる内容について（別冊・表8）

『道教事典』によれば、「張天師、正一教（派）の教主一般的な呼称。正一教では五斗米道を唱えた張陵を始祖とし、張陵を天師と称した事から教主を天師、教団を天師道と称し、教主は張陵の子孫に世襲された。後に天師道は正一教、天師は真人と改められたが、民間では正一教主を張天師と呼称して現在に至っている」という[『道教事典』1994 : 408]。

張天師神画には、張天師は神画の中央部に大きく描かれるが、脇侍が配されていない。また、図6-8の上部には、「張天師」という文字が記されている。

張天師は、両腕は内側に曲げ、両手を合わせて圭を縦に持ち、胸まで上げた立ち姿で向かって左を向く（図2-8の張天師は向かって右を向く）。また虎に乗る姿として描かれる場合もあり、図9-8と図11-8の張天師はその姿勢となる。また図11-8に描かれている張天師の腕の姿勢は他の神画と異なり、左手は剣を縦に持っており、右手は立掌しながら手訣を結ぶ。

張天師の頭部に円環と炎状の光背が配され、光背の周りに赤色や青色などの瑞雲が描かれている。張天師は三つの眼を持ち、三つ目の眼は額の中心にある。髪の毛は頭頂で結び、その上に髪冠を冠る。両鬢の髪の毛は犬耳のように立っている。眉尻を高く上げ、目は丸く大きく見開く。髭は鐘馗のように鬚まで続く。眉・眼・髪と髭の色は赤色あるいは黒色であり、図1-8-1、図1-8-2、図2-8、図8-8、図9-8、図10-8は赤色で、図4-8、図5-8、図6-8、図7-8、図11-8は黒色である。

張天師は袍を着るが、八卦模様(☰・☷・☱・☶・☲・☵・☴・☳)の八卦袍と龍袍も見える。図2-8、図6-8、図7-8、図9-8、図10-8、図11-8の張天師は八卦袍を着、図1-8-1、図1-8-2、図11-8は龍や瑞雲や浪などの模様の袍を着る。また図5-8、図8-8は花と瑞雲模様の袍を着ると描かれている。袍の色に関しては、主に赤色で描かれているが、他には黄色と白色も見られる。図1-8-1と図1-8-2の張天師は黄色の袍を着、図6-8は白色の袍を着る。

神画の背景として瑞雲が描かれている。図10-8には剣が描かれており、図11-8の下部の右には1羽の鳥が描かれている。

第8項 李天師神画に描かれる内容について(別冊・表9)

李天師神画と張天師神画は対となるものである。通常李天師は向かって右を向き、張天師は向かって左を向くと描かれるが、時には、李天師が向かって左を向き、張天師が向かって右を向くように描かれる場合も見られる(図2-8、図2-9)。

李天師は、神画の中央部に大きく描かれ、脇侍が配されていない。神画の上部には、「李天師」が記されている(図1-9、図6-9)。また上部の中央には、「卍」という符号が書かれる場合もある(図2-9)。

李天師は、両腕は内側に曲げ、両手を合わせて圭を縦に持ち、胸まで上げた立ち姿で右を向く。通常立つ姿勢で描かれているが、麒麟や獅子に乗る姿で描かれる場合もある。図9-9の李天師は獅子に乗るが、図11-9は麒麟に乗ると描かれている。また、図11-9に描かれている李天師の腕の姿勢は他の神画と異なり、左手は立掌しながら手訣を結び、右手は剣を縦に持っている。また、図9-9と図11-9の李天師は鞋を履いておらず、素足の姿で描かれている。

李天師の頭部に円環と炎状の光背が配され、光背の周りに赤色や青色などの瑞雲が描かれている。通常髪の毛は頭頂で結び、その上に髪冠を冠るが、髪は肩にぶら下がり描かれる場合も見られる(図9-9、図11-9)。眉・眼・髪と髭の色は黒であるが、5-9の髪の毛は緑色で描かれた。

李天師は八卦袍あるいは龍袍を着る。図1-9、図2-9、図6-9、図7-9の李天師は八卦袍を着、図9-9、図10-9、図11-9は龍と瑞雲模様の龍袍を着る。また花と瑞雲模様の袍を着る場合もある(図4-9、図5-9、図8-9)。袍の色に関しては、通常黒色で描かれているが、他には紺色と藍色も見られる。図4-9は紺色で、図5-9、図7-9と図8-9は藍色である。

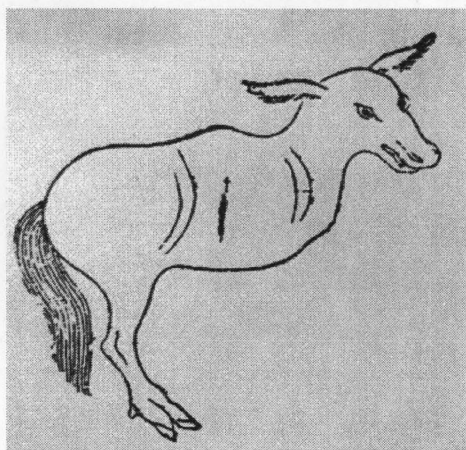
神画の背景として瑞雲が描かれている。図1-9、図2-9、図10-9には、さらに剣が加えられている。図9-9には、さらに華蓋が加えられている。図9-9、図10-9、図11-9の下部には、さら

第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

に亀と蛇が描かれている。図 11-9 の左上には、さらに蝙蝠が描かれている。中国語の中で、蝙蝠 (biānfú) の発音は「変福」(biānfú、福になる)と音が近いため、中国では吉兆とされる。神画に蝙蝠を描くことも同じ意味を表していると考えられる。

李天師の乗っている獣について、Lemoine は「李天師は、巨大な水牛のようなものに乗っている。この獣は中国神話中の^{きぎゅう}夔牛と呼ばれるものである。」という [Lemoine 1982:71 PL. 69; PL. 70]。夔牛に関しては、『山海経』⁴¹ には記されており、次の通りである。

東海の中に流波山あり、海につきでること七千里、頂上に獣がいる、状は牛の如く、身は蒼くて角がなく、足は一つ。これが水に出入するときは必ず風雨をともし、その光は日月の如く、その声は雷のよう。その名は夔。



〈図 7〉『山海経図』に描かれる夔⁴²

『山海経』[『抱朴子・列仙伝・神仙伝・山海経』1998:497-499]に記された夔の描写から、夔は「状は牛の如く、身は蒼くて角がなく、足は一つ」という様子が分かる。しかし李天師神画に描かれている、Lemoine に夔牛だと呼ばれる獣の様子は、『山海経』の記述と一致していない。よって、李天師が乗っているのは、夔牛ではないと言える。この点に関して、Lemoine は読み間違えたと考える。筆者は、その李天師神画に描かれている、顔は獅子に似て、獅子の尾と牛の蹄と鹿の角を持ち、体表に鱗を覆うという特徴を持つ獣は麒麟だと推断する。

第9項 把壇師(趙元帥)神画に描かれる内容について (別冊・表 10)

把壇師(趙元帥)神画に描かれる主神は趙元帥であり、元帥神が描かれる神画の中の一種類である。本論で取り扱う神画資料の中に、元帥神が描かれる神画は、4 種類があり、把壇師(趙元帥)神画の他には、馬元帥、王靈官、鄧元帥神画がある。ここでは、まず把壇師(趙元帥)神画に描かれる内容を読み取る。

「把壇師」という神画の名称は、主に湖南省永州市藍山県過山ミエンの祭司が使っている名称である (図 1-10, 図 2-10)。「把壇」とは、祭壇を守備する意味である。神画には、元帥神が描かれているので、「把壇師」は、祭壇を守備する元帥の意味であると考ええる。「把壇師」神画は、タイ北部のミエン地域では「趙元帥⁴³」と呼ばれる (図 9-10, 図 11-10)。また、台北世界宗教博物館に収蔵されている広西壮族自治区南寧市賓陽県ミエン地域の神画には「把壇元帥」とも書かれる。筆者は現地調査の際に、ミエンの祭司は神画名を「把壇師」と書くのを確認したが、神画に趙元帥が描かれているため、本論では合わせて「把壇師(趙元帥)」という名称を用いる。

第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

神画の全体的な構図としては、把壇師は中央に描かれており、下部の左右には各一人の脇侍が描かれている。図1-10と図2-10の上部には、文字が書かれており、一部が剥離しているため、正確に読み取れないが、「把堂師」あるいは「把堂帥」と書かれていると看取できる。

通常把壇師(趙元帥)は立ち姿勢であり、左を向くか、あるいは右を向く。他には、虎に乗る姿勢も見られる(図10-10)。把壇師の左腕は、内側に曲げて胸の前に置き(図1-10、図9-10)、あるいは体の横に置く(図2-10)。手に金輪を持ち⁴⁴(図9-10)。右腕は上方に高く上げ、手に鉄鞭を持つ。

把壇師(趙元帥)は武官の装束であり、頭に武官の帽子を冠っており、帽子の両側に犬耳のような髪の毛が立っている。髭は鐘馗のように鬚まで続く。眉尻が上に上がり、目は丸く見張ったようである。黒色の上着を着、赤色の裳を穿く。衣装には太陽のような模様を描かれている(図9-10)。

神画下部の両側に、二人の武官形の男脇侍がそれぞれ立っている。通常二人とも把壇師と同じ方向を向くと描かれる。時には、右側の脇侍は振り返って左側の脇侍を見つめるように描かれるのも見られる(図1-10、図2-10)。神画の背景として瑞雲が描かれている。

第10項 馬元帥神画に描かれる内容について(別冊・表11)

馬元帥は先述したように、元帥神が描かれる神画中の一種類である。馬元帥神画全体的な構図としては、中央に主神である馬元帥を大きく描き、下部には二人の男性の脇侍が描かれている。また、神画の上部に「馬元帥」という文字が書かれているのも見られる(図6-11)。

馬元帥は立ち姿であり、向かって右を向く。左腕は内側に曲げて胸の前に置き(図1-11、図9-11)、手に圭(図8-11)或いは鉞(図6-11)を持つ。右腕はやや曲げて体の横に置き、手は手訣を結ぶ。武官の帽子を冠り、頭部に輪状の光背を配し、肌が白い若い男神である。通常黄色の上着を着るが、緑色の上着を着て白色の裳を穿いてと描かれる場合もある(図6-11)。

神画下部の左右に、二人の武官形の男性の脇侍がそれぞれ立っている。向かって左側の脇侍は武官の帽子を冠り、藍色の袍を着、腰に白色の腰巻きを巻く。図6-11に描かれている向かって左側の脇侍は、帽子を冠っておらず、髪の毛を頭の頂に結び頭巾で隠す。白色の衣を着、腰に白色の腰巻を巻き、黄色の裳を穿く。素足で靴を履いていない。左腕はやや上へ上げ、手に黄色の盞を持っている。

向かって右側の脇侍は、黒色の衣を着、黄色あるいは赤色の裳を穿く。武官冠を冠り、帽子の両側に犬耳のような髪の毛が立っている。髭は鐘馗のように鬚まで続く。眉尻が上にあがる。髪の毛と髭の色が真紅である。右腕を内側に曲げ、手に剣を持ち、左手は剣体を支える。また神画の背景としては、瑞雲が描かれている。

第11項 王靈官神画に描かれる内容について (別冊・表12)

窪徳忠によれば、「王靈官は、姓は王、名は奕または善といい、元始天尊の命をうけた姜子牙すなわち呂尚によって、九天応元雷声普化天尊に任命された聞仲の指揮下に属している雷部二十四神の中の一人で、雷を起こし、雨を助ける神となっている」という[窪 1996 : 217-218]。

王靈官神画は、また「黄元帥」とも書かれる(図6-12)。中国の西南官話では、「黄(huáng)」字と「王(wáng)」字の発音が非常に似ているので、「黄元帥」は「王元帥」の書き間違いではないかと考えられる。本論では、筆者の聞き書きにより、「王靈官」という名称を用いる。

神画の全体的な構図としては、主神である王靈官は中央部に大きく描かれ、下部両側に各一人の脇侍が描かれている。神画の上部には、「黄元帥」という文字が書かれている(図6-12)。

元帥は立ち姿勢であり、向かって左を向く。右腕は内側に曲げて胸の前に置き、手に剣あるいは鉄鞭(図2-12)を持つ。左腕はやや曲げて体の横に置き、手訣を結ぶ。頭に髪冠を冠り、冠の両側に犬耳のような髪の毛が立っており、勇猛そうに見える。髭は鐘馗のように鬚まで続く。眉・髭・髪の色は全て赤色である。額の中心に三つ目の眼がある。

神画下部の両側に、二人の武官装束の男脇侍がそれぞれ立っている。向かって左側の脇侍は武官冠を冠り、武官式の衣裳を着、左腕を内側に曲げ、手に剣を持ち、右手は剣体を支える。向かって右側の脇侍は、鳥口先で三眼を持つ。上半身は裸で、赤色あるいは藍色の裳を穿き、腰に虎皮を巻く。右手に斧を持ち、高く上に上げており、左手に錐を持ち、胸の前に置く。両足は鶏脚であり、素足で火車を踏む。髪と眉毛が真紅であり、背中に羽が伸び、皮膚が青色である(図7-12)。この脇侍の様子は、鄧元帥神画に描かれる鄧元帥と完全に一致している。よって、鄧元帥だと推断する。また図2-12に描かれている向かって右側の脇侍は、異なる様子であり、髪冠を冠り、肩に白色の巾を縛り付け、腰に白色の腰巻を巻き、赤色の裳を穿く。右腕を内側に曲げ、手にチャルメラのような形の法具を持っている。神画の背景として瑞雲と炎が描かれている。

第12項 鄧元帥神画に描かれる内容について (別冊・表13)

鄧元帥神画は、筆者の収集した元帥類の神画の中では数的に少ない神画の種類である。この類の神画は主にタイ北部のミエンに用いられる。湖南省永州市藍山県・江華瑶族自治县・広西壮族自治区恭城瑶族自治县のミエン地域において、鄧元帥は主神として神画の中央に描かれず、通常王靈官神画の下部の脇侍として描かれる。

鄧元帥は雷部の24神の一人であり、雷部の神将として活躍するとされる[『道教事典』1994 : 584]。神画全体的な構図としては、中央に鄧元帥を大きく描き、下部には二人の男脇侍が描かれている。

鄧元帥は立ち姿勢であり、向かって左を向くか、あるいは右を向く。頭に金色の髪冠を冠り、頭部の周囲には真赤な炎が描かれている。右腕は内側に曲げて腹の前に置き、手に斧を持つ。左